同志社編『新島襄自伝――手記・紀行文・日記』岩波書店、2013年。

《誕生からアメリカ入国まで　一八四三―六五年》

日本脱出の理由

〔Ⅶ―三〕原英文。新島には、自伝がない。自伝的な短い手記が、二編あるだけである。この文書と、次の「私の若き日々」である。両者ともに英文で書かれ、前半生で終っている。後半生の帰国後の活動に関しては、まとまったものはない。いずれも、A・S・ハーディー（新島襄の養父ともいうべきアルフィーアス・ハーディーの三男）が著した *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* に収録されている。元の草稿は、所在不明である。

一八六五年七月、新島は、函館（当時は箱館）を密出国しておよそ一年後、ようやくボストンに着いた。上海で新島を乗船させてくれたワイルド・ローヴァー号の船長（H・S・テイラー）は、船主のアルフィーアス・ハーディーに新島の保護者となるよう、支援を要請した。

密出国して渡米した理由を文章にするようにハーディーから言われた新島が、必死で書き上げたのが、本稿である。文体、内容から見て、第三者の指導があったことが窺われるが、それまで、系統的に英語を学ぶ機会がまるでなかった日本人（二十二歳）の英作文としては、まずまずの出来栄えである。キリスト教的な記述を交えている点など、ボストン有数のクリスチャン、ハーディーの心を捉えるのに十分な仕上がりである。

ハーディー夫妻は、これを読んで感激し、新島を「養子」同然の扱いで家庭に受け入れる決断をくだした。こうして、新島がようやく「入国」できた時には、ボストンに「入港」してから、三カ月が経過していた。品川出港から数えれば、実に一年半後のことである。（本井）

〔脳みそがとろけ出るほどのショック〕

私はある藩主（板倉勝明）の江戸藩邸（安中藩上屋敷）で生まれた。父（新島民治）は藩邸内で書道の師匠と祐筆をつとめていた。祖父も藩主に仕える身で、全体（足軽など）を取締る執事だった。私は六歳から日本の古典と漢籍とを学び始めたが、十一歳の時、それまでの考えを一変させて剣道と馬術を習い始めた。十六歳の時、漢籍を学びたい気持が高まったので、剣道などはやめてしまった。

けれども藩主は私を日誌記録係に抜擢した。しかし、それは私がやりたくなかった仕事だった。私は一日おきに藩邸の執務室に通わなければならなかった。そのうえ自宅で父に代わって男の子や女の子らに書道を教えなければならなかった。そのため漢学塾に通って漢文を勉強することはできなかった。けれども本は毎晩自宅で読んでいた。

ある日、友人がアメリカ合衆国の地図書（『聯邦志略』）を貸してくれた。それはあるアメリカの宣教師（E・C・ブリッジマン）が漢文で書いたもので、私はそれを何度も読んだ。

その本で大統領の選出、授業料無料の公立学校や救貧院、少年更生施設、工場などを建てることを知って、脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した。そこで私は、わが国の将軍もアメリカの大統領のようでなければならないと思い、こうつぶやいた。

「ああ日本国の将軍よ、なぜあなたはわれわれを犬や豚のように抑圧するのか。われわれは日本の人民だ。かりにもわれわれを支配するのならば、あなたはわれわれをわが子のように愛さなくてはならない」と。

〔蘭学を学ぶ〕

その時以来私はアメリカのことを学びたいと思うようになった。しかし、残念なことにそれを教えてくれる教師はひとりもいなかった。私はオランダ語を勉強したくはなかったけれども、私の国ではオランダ語を読める人が多かったから、それを勉強せざるを得なかった。そこで私は蘭学を学ぶために教師の家に一日おきに通った。

ある日、私は藩邸の執務室に出ていたが、記録することは何もなかった。そこで執務室を抜け出し、蘭学教師の家に行った。やがて藩主〔実際は上役〕が執務室に来て、私を探された。ところが誰もそこにいなかったので、藩主は私が戻ってくるまで待っておられた。私を見るなり、藩主は私を殴りつけた。「なぜ執務室を抜け出したのか。ここから逃げ出すとはもってのほかだ」。

十日後に私は再び逃げ出したが、藩主には気づかれなかった。しかし、残念にもその次に逃げ出した時には見つかってしまい、殴られた。「おまえはなぜここから逃げたのか」と尋ねられたので、私は答えた。

「外国の知識が学びたかったのです。外国のことをできるだけ早く理解したいのです。ですから執務室に詰めて、お殿さまが決められた規則を守らなくてはならないことは承知しておりますが、私の心は勉強のためにすでに先生の所に行っております。それゆえ私の体もまたそこへ行かざるを得なかったのです」と。

すると藩主は非常にやさしくこう言われた。「おまえは習字が上手だから、それで生計を立てていける。二度とここから逃げ出さないならば、俸禄を増やしてやってもいい。どうしておまえは外国の知識などにあこがれるんだ。それは道を誤るもとだ」と。

私は言った。「どうしてそれが道を誤るもとになるのでしょうか。誰でも何らかの知識を持つべきだと思います。知識を全く持たない人は、犬や豚にひとしいと思います」と。それを聞いて藩主は高笑いをして「おまえはしっかりしている」と言われた。この件では藩主のほかにも祖父、両親、姉たち、友だち、隣人たちが、私を殴ったり、嘲笑したりした。しかし、私は彼らのことを全く気にせずに自分の考えを堅持した。

二、三ヵ月後、執務室での仕事が増えたので、抜け出せなくなった。ああ、これが原因で私はあれこれと思い煩い、病気にもなった。誰にも会う気がせず、遊びに出たい気持も起こらなかった。ひたすら静かな部屋にこもっていたかった。ひどい病気だと分かったので、薬をもらいに医者の所へ行った。医者は念入りに私の病気を診察した後で、こう言った。「君の病気は心が原因だ。高ぶった気持をまずすっかり静めるようにしなければいけない。身体の健康のために散歩をする必要がある。散歩のほうが薬をたくさん飲むよりも、はるかに効き目がある」と。

藩主は病気を治すために時間をたっぷりくださり、遊ぶために父も金をいくらかくれた。しかし、私はオランダ語を学ぶために毎日教師の家に通った。長時間を費してオランダ語の文法書を読み終えてから、自然科学の小冊子にとりかかった。この本は大変面白かったので、医者のくれた薬よりもずっとよく私の病気に効いたと思う。

二、三ヵ月後に病気がよくなると、藩主は再び私を抜擢して日誌記録の仕事を命じられた。藩主の命令に従って、私は毎日執務室に詰めていなければならなかった。ああ、もうオランダ語の勉強のためにそこを抜け出すことができない。私は仕方なく自宅で夜間に時間をかけて本を読んだ。そして蘭和辞典をたよりに、例の自然科学の本を読み終えた。けれども悲しいことに、夜の勉強のために目を傷めたので、またもや勉強を中断

せざるを得なくなった。

〔算術と航海術に熱中〕

十週間たつと、目の病気が完全に回復したので、再びその本を読み始めた。けれども、計算式で分からないところがあったので、算術を学びたいと思った。しかし、そのための時間は全くなかったから、ある日藩主に「勉学のためにもっと時間をください」とお願いした。そこで藩主は週三回、私が執務室から離れることを許可してくださったが、私にはまだ十分とはいえなかった。私はある算術の塾に通って、足し算、引き算、掛け算、割り算、分数、利息算などを習得した。その後、例の自然科学の本を再読すると、計算式の部分がよく理解できた。

ある日、私は海がみたいと思って、江戸湾に行った。そこで私はびっくりするほど大きなオランダ軍艦を見た。それは私には城か砲台のように見えた。この船は、敵と戦えば強いだろう、とも思った。この船を眺めていると、ある思いが頭にひらめいた。私たちは海軍を作らなくてはならぬ、との思いである。なぜなら、わが国は周囲を海で囲まれており、もし外国から攻撃を受ければ、海上で戦わなくてはならないからだ。

しかし、別の思いも浮かんできた。外国人が貿易を始めてから諸物価があがり、わが

国は以前よりも貧しくなった。日本人は外国人と貿易する方法を知らないから、私たちは外国に出かけて貿易の仕方を覚え、外国に関する知識を学ばなくてはならない、との思いである。

ところが国法は、私の思いを全く無視するものであったので、私はこう叫んだ。

「幕府はなぜ私の思いを無視するのか。なぜわれわれを自由にしてくれないのか。なぜわれわれを籠の鳥か袋のネズミのようにしておくのか。そうだ、われわれはそんな野蛮な幕府は倒さなくてはならない。アメリカ合衆国のように〔国民が直接選挙で〕大統領を選ばなくてはならない」と。

しかし悲しいかな、そのようなことは、私の力のおよばないことだった。

その時以来、私は幕府の軍艦教授所〔後に軍艦操練所〕に週三回通って、航海術を学んだ。何ヵ月もかけて、代数学や幾何学が多少分かるようになり、航海日誌のつけ方や天体観測の仕方、緯度の測り方なども修得した。けれども悲しいことに、夜間の勉強のせいでまたもや目を悪くし、一年半ばかりというもの、全く勉強ができなくなった。こんなことは人生に二度と起きてほしくない。目がよくなると、藩邸の執務室にまた詰めざるを得なくなった。

江戸はそのころ非常に暑くて、病人が多く出た。日中、太陽がじりじりと照りつけた

ある日、夕方に大雨が降った。その時私は寒気がして、ぞくぞくしてきた。翌朝には頭痛が始まり、体内で火が燃えているかのように身体がほてってきた。何も食べられず、冷たい水を飲むだけだった。二日後には発疹が体じゅうに出てきた。麻疹がなおると目が悪くなり出したので、ぶらぶらと過ごす時間が多くなった。

〔キリスト教に触れる〕

ある日友人を訪ねると、彼の書斎で聖書から抜粋したものをまとめた小冊子を見つけた。それはあるアメリカの宣教師が漢文で書いたもので、聖書の中のもっとも重要な出来事だけが記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全員を磔にするので、私は野蛮な国のおきてを恐れていたからだ。

私はまず神のことが理解できた。すなわち神は天と地を分けたうえ、光を始めとして草木や鳥獣、魚などを〔次々と〕地上に創造された。神はご自身の姿に似た形に男を創り、そして彼のあばら骨を切り取って女を創られた。神は宇宙のすべてを創造した後で休まれた。その日を私たちは、日曜日または安息日と呼ばねばならない。

次に私はイエス・キリストが聖霊の御子であること、その方は全世界の罪のために十

字架につけられたこと、それゆえ私たちはその方を私たちの救い主と呼ばなくてはならないことを理解した。そこで私はその本を置き、あたりを見まわしてからこう言った。「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神だ。神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実にどこかの木からできたものだ。そうであるなら、私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」と。

この時から私の心は、英語の聖書を読みたいという思いに満たされたので、箱館(函館)に行って、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つけようと決意した。そこで藩主と両親に対して箱館に行かせてほしいとお願いした。彼らはそれを許さなかった。それどころか、それから私を警戒するようになった。しかし私の固い決意は彼らの説諭によっても変わらなかった。私は自分の願いを持ち続け、神に向かって、「どうかお願いですから志を達成させてください」とひたすら祈っていた。

それから私は、ある日本人の教師から英語を習い始めた。ある日、江戸の街中を歩いていると、私の知人で私を可愛がってくれていた洋式帆船(快風丸)の船長(船員の加納格太郎)に突然出くわした。「船はいつ出るのですか」と聞くと、「三日以内に箱館に向けて出帆する」とのことだった。「連れて行ってもらえますか。お願いですから行かせてください」と言ったところ、「連れて行ってもいいが、君のお殿さまとご両親がお許しにならないだろう。まずそちらに頼むことだ」と彼は答えた。

二日後、私はいくらかの金(二十四両)と少しばかりの衣服、それにわずかな書物とをたずさえて家を出た。もしこの金がなくなったらどうやって衣食をまかなうのかを考えることもなく、ひたすらこの身を神の御手にゆだねた。

〔箱館から密出国〕

翌朝私は箱館行きの洋式帆船に乗りこんだ。箱館に到着して適当な英語の教師を探したが、八方手をつくしても見つけられなかった。そこで私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った。

しかし、私はためらった。祖父や両親を悲しませるだろう、との思いがあったからだ。その思いがしばらくの間、私の心を捉えた。けれども、やがて別の考えが頭にひらめいた。それは、私は両親から生まれ育てられたが、本当は私は天の父のものである。それゆえ私は天の父を信じ、その父に感謝し、そしてその父の道を進まなくてはならない、という考えである。こうして私は日本から連れ出してくれる船を探し始めた。

あれこれ苦労した末に、私は上海行きのアメリカ船(ベルリン号)に乗りこんだ。上海

の河口に到着ののち、ワイルド・ローヴァー号に乗り換え、約八カ月間、中国沿岸を往来した。神に守られて、四カ月間航海したのち、ボストン港に着いた。

初めて〔同号の〕H・S・テイラー船長に〔上海で〕会った時、「もしアメリカに到着したら、お願いですから学校に行かせてください。よい教育を受けさせてください。そのため私は力の限り船内で働きます。あなたから賃銀をいただくつもりもありません」とお願いした。船長は「帰国したら学校に通わせてやろう。船内では私の使用人として働かせてやろう」と約束してくれた。船長は金銭こそ支給しなかったが、〔港に寄った際には〕衣服や帽子、靴、その他のものを買ってくれた。船中では航海日誌のつけ方、緯度、経度の測定の仕方を教えてくれた。

〔ボストンでハーディー氏と会う〕

当地〔ボストン〕に着くと、船長のおかげで長い間、船内にとどまることができた。その間私は船を守る不信心な荒くれ船員たちと一緒だった。港の人は誰も彼もこう言って私をおどした。「南北戦争以後、物価があがったので、陸(おか)の上ではおまえに救いの手を差しのべてくれる奴など一人もおらん。残念だが、もう一度海に戻るんだな」と。

私は衣食のために相当働かなくてはならないと思った。学校に納める金を稼ぐまでは、

とうてい学校には入れない。そのような考えにとりつかれると、私はあまり働く気が起こらず、また本も楽しく読めなかった。精神に異常をきたした人のように長時間ただあたりを見回すだけだった。毎晩、ベッドに入ってから「お願いですから私をみじめな境遇に追いやらないでください。どうか私の大きな志を成就させてください」と神に祈った。

それから〔三カ月後〕私は船の持主であるハーディーさまが私を学校へ送り、経費を一切出してくださるかもしれないことを知った。船長からこのことを初めて聞かされた時、私の両眼は涙にあふれた。ハーディーさまへの感謝の気持が大きかっただけでなく、神は私をお見捨てにならない、と思ったからである。

《一八九〇年》

遺言（大磯）

〔Ⅳ-四〇三〕新島は二度、遺言を認めている。一通は、一八八四年の夏にヨーロッパを旅行中、アルプスのサン・ゴタール峠で呼吸困難に陥り、死を覚悟して作成した英文の遺言（本書二五〇ページ）。二通目は、一八九〇年一月、神奈川県大磯（百足屋旅館）で臨終を迎えた際、愛弟子の徳富猪一郎（蘇峰）に口述筆記させたもの。そこでは、私的遺産にはいっさい触れていない。大半が同志社の学生に関することで占められた。教職員に対して、自分の宿志を受け継いで、学生たちによい教育をしてもらいたい、と具体的な指示を遺した。なかでも、文中の「倜儻不羈」という文言は、新島の生徒観をよく表している。なお、新島は、これ以外にも、大隈重信や伊藤博文、勝海舟など、個人宛ての遺言をも十数通残している。（本井）

新島八重子、小崎弘道、徳富猪一郎立会

〔一八九〇年一月）二十一日午前五時半遺言の条々

同志社の前途は、基督教の徳化、文学、政治等の興隆、学芸の進歩、三者相伴い、相俟ちて行うべき事。

同志社教育の目的は、その神学、政治、文学、科学等に従事するにかかわらず、皆、精神、活力あり、真誠の自由を愛し、もって邦家に尽くすべき人物を養成するを努むべき事。

社員（スタッフ）たるものは生徒を鄭重に取り扱うべき事。

同志社においては、倜儻不羈なる書生を圧束せず、努めてその本性に従い、これを順導し、もって天下の人物を養成すべき事。

同志社は隆なるに従い、機械的に流るるの恐れあり。切にこれを戒慎すべき事。

金森通倫氏をもって余の後任となす、差支えなし。氏は事務に幹練し、才鋒当るべからざるの勢いあり。しかれどもその教育家として人を順育し、これを誘掖するの徳に欠

け、あるいは小刀細工に陥るの弊なしとせず。これ余の窃かに遺憾とする所なり。

東京に政法理財学部を措くは、目今の事情、到底避くべからざるかと信ず。

日本教師と外国教師の関係に就いては努めて調停の労を取り、もってその円滑を維持すべき事。余はこれまで幾度かこの中間に立ちて苦心あり。将来といえども、社員諸君が日本教師に示すにこの事をもってせんことを望む。

余は平生敵を作らざるを期す。もし諸君中、あるいは余に対して釈然たらざる人あらば、幸いにこれを恕せよ。余の胸中、一点の芥蔕あらず。

従来の事業、人あるいはこれを目して余の功とす。しかれども、これ皆、同志諸君の翼賛によりて出来たる所にして、余は毫も自己の功と信ぜず。唯諸君の厚情に感佩す。

右筆記の上、これを朗読す。先生一々これを聞き、首肯す。

時に午前七時十分前。

複合領域科目1-81「良心学」第3回

同志社と良心教育

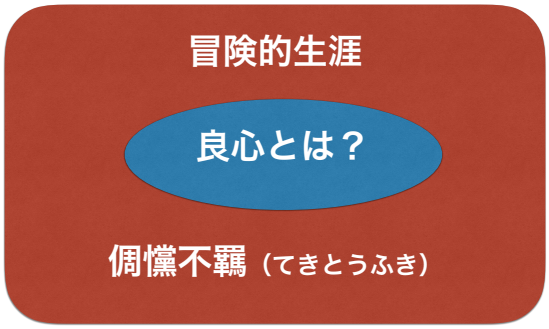
—— 未来を展望するための原点 ——

Overview

- 「壁」を越えるために
  ——「日本脱出の理由」「遺言」を踏まえて
- 新島の教育思想
- 同志社の教育理念の変遷
- 良心教育の起源

「壁」を越えるために

—「日本脱出の理由」「遺言」を踏まえて—



脱国までの新島襄

- 幼年期・青年期の新島
  - 21歳まで江戸の安中藩邸内で暮らす
- 空間的な制約：鎖国
- 時代的な制約：封建的な社会秩序

新島の新しい一歩

- 「壁」を壊す、「運命」を切り開く
- 「自由」を求めて

なぜ日本を脱国したのか？

- ボストン到着後の新島がハーディ夫妻に宛てた手紙
- 「日本脱出の理由」（原英文、1865年）
  - 強い知的好奇心・探求心
  - 「創造者なる神」との出会い：世界観の変化
  - 自由への強いあこがれ
  - リスクを負うこと

現代における課題

- 現代社会における「壁」とは何か
- 「わたし」にとっての「壁」とは何か

新島襄の遺言（1890年）

- 同志社においては倜儻不羈（てきとうふき）なる書生を圧束せず、努めてその本性に従い、これを順導し、もって天下の人物を養成すべき事。
- 同志社は隆（さかん）なるに従い、機械的に流るるの恐れあり。切にこれを戒慎すべき事。

新島の教育思想

- 知徳並行教育：知育と徳育（心育）の両立
- 自由主義（自由教育）
- 「人ひとり」を重視
- 地方教育論

自由主義――時代への批判

ただ職人のみを出来（しゅったい）し、**道徳の教え立たざれば**
民権を拡張し、人民をして自由を得せしめば
道徳の教え立たざれば
人を罵詈（ばり）するの民増す。（中略）
自由を得るも又これを我儘（わがまま）に用ゆるの憂いあり。（中略）貴重の民権を下して下等の我儘と混ずるの憂いあれば、国の幸福期し難く、我儘起り国家の滅亡の基礎となるも計り難し。

（「愛人論」作成年月日不詳、『新島襄 教育宗教論集』293頁）

同志社創立10周年記念式での祝辞

「諸君とともに過去を追想して記念としたいのは、昨年私が〔渡米で〕不在中に同志社を退学させられた人々のことである。ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き真の学問をしていた人であったが、ついに退学させられることになった。諸君よ、**人ひとりは大切である。ひとりは大切である。**過去はすでにすぎたことなのでどうしようもない。しかし、今後については私たちはまことに用心深くありたいものである」（先生は涙を流し、胸をつまらせながら述べられたので、満場ひとりとして涙ぐまない者はなかった）。（『現代語で読む新島襄』183-184頁、『新島襄 教育宗教論集』112頁）

地方教育論（1882年）

教育に付いて論ずるに何の差別もあるまじきに、何故地方教育論を為すかを問えば、答えて日わん、我国の教育の如きは東京、中央に集まり、何学も中央に行かねば学問のなき事に成行き、又中央の地に於て受ける所の悪風は、生徒を腐敗せしむるに□し。これを薫陶し、これを養生するに、勢力の乏しき事あれば、今日の勢いを以て論ずれば**真正の教育を地方に布くに如かず。**（中略）海陸軍を増すは弥末の浅論なり。

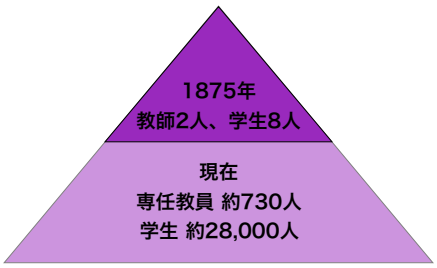
（『新島襄 教育宗教論集』85-86頁）

同志社の教育理念の変遷

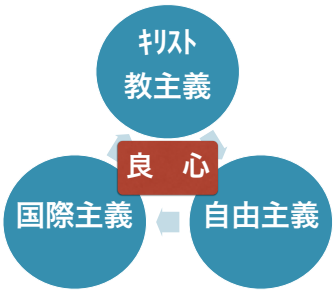
・理念は必ず形骸化する。

・形骸化した理念が「壁」となることがある。

同志社の変化



現在の同志社の教育理念



教育理念の起源

- 基督教主義、自由主義
  - 新島に起源がある。
- 国際主義
  - 新島は使っていない。
  - 海老名弾正（1856-1937、第8代同志社総長）が、新島の教育理念として強調する。

基督教主義とは？

これ基督教主義をもって、我が同志社大学**徳育の基本**と為す所以、而してこの教育を施さんが為に、同志社大学を設立せんと欲する所以なり。
　吾人の目的かくのごとし。もしそれこの事を目して基督教拡張の手段なり、伝道師養成の目的と云う者は、未だ吾人が心事を知らざる人なり。吾人が志す所の者、なおその上に在るなり。（「同志社大学設立の旨意」1888年）

国際主義の模索――原田 助（たすく）

- 原田 助：熊本洋学校で学び、1880年に同志社に編入、新島の薫陶を受ける（大西 祝と同時期）。1885-87年、神戸教会牧師。1907-1919年、同志社第7代社長（総長）。
- 時代背景：日露戦争後、国家主義（膨張主義）に対し、国際主義への関心が高まっていた。
- 原田の国際主義の基本は世界宗教としてのキリスト教。キリスト教信仰と国家（天皇）への忠誠は両立すると考えた。
- ただし、教育の目的を国家を超えた「人類」に向けていた。

- 原田 助「教育の根底」（1906年）
  - 1906年に出された文部大臣による訓令に対する批判。訓令は、国家の将来のために学生が規律を正すことを強く求めた。
  - 「夫れ教育の目的は**人類をして**其天賦の霊能を発揮せしめ天と人とに対する本分を尽さしむるにあり、是点に於て教育と宗教は全然其目的を一にす、教育者たる者此信念に依らず徒に芸を授け若しくは規律を励行して以て自修克己の精神を喚発せんとするも難い哉。」「教育の根底」（『信仰と理想』1906年、214頁）
- 原田は積極的な国際交流を進めた。また、国内外から多様な人材を招き、学生の国際感覚を養うことに努めた。

同志社の精神的遺産――湯浅八郎

- 湯浅八郎（1947年から二期目の総長を務める）は、次の四つを「同志社の精神的遺産」として強調。
  1）新島先生、2）キリスト教主義、3）国際主義、4）民主主義
- 湯浅は、同志社は三流大学であると断言して、はばからなかった。しかしこの四資源があるおかげで、同志社はその輝かしい歴史と伝統をうけついで、世界に貢献できる教育機関たらしめることができる、と主張した。（『同志社百年史』1293-94頁）

良心教育の起源

良心を手腕に運用するの人物

かくのごとくにして同志社は設立したり。然れどもその目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、その徳性を涵養し、その品行を高尚ならしめ、その精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂（いわゆる）**良心を手腕に運用するの人物**を出ださんことを勉めたりき。（「同志社大学設立の旨意」1888年）

自治自立の人民

吾人は政府の手において設立したる大学の実に有益なるを疑わず。然(しか)れども人民の手に拠(よ)って設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず。素(もと)より資金の高より云い、制度の完備したる所より云えば、私立は官立に比較し得べき者にあらざるべし。然れどもその生徒の独自一己(いっこ)の気象を発揮し、**自治自立の人民**を養成するに至っては、これ**私立大学**特性の長所たるを信ぜずんばあらず。（「同志社大学設立の旨意」1888年）

一国の良心

一国を維持するは、決して二、三、英雄の力にあらず。実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざるべからず。これらの人民は**一国の良心**とも謂うべき人々なり。而して吾人は即ち、この**一国の良心**とも謂うべき人々を養成せんと欲す。（「同志社大学設立の旨意」1888年）

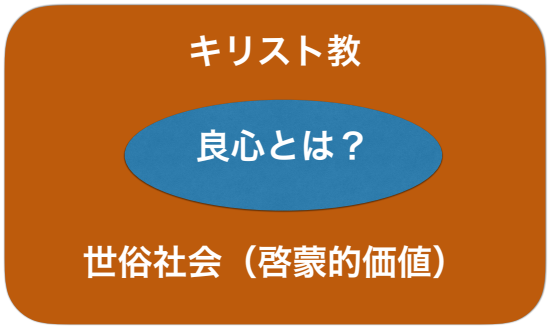
良心碑

良心の全身に充満したる丈夫(ますらお)の起り来たらん事を

- 新島永眠50周年の1940年11月29日（創立記念日）に建てられた。
- 最初の候補は「良心を手腕に運用する」であったが、横田安止(やすただ)宛手紙（1889年11月23日）の言葉に変更。理由：（1）「良心を手腕に運用する」は論理的におかしいとの異論。（2）新島の言葉ではない。（本井康博『千里の志』思文閣出版、2005年、107-108頁）

新島と conscience

- NEESIMA'S FIRST COMPOSITION, 9th May, **1866**. Joseph Nee Sima
  - I told him, "If you should see my father, tell him, Be not concerned for me; I have found very good friends, who love me for **conscience** sake; - and I am very well through the mercy of Him who made the world."
- デーヴィス宛書簡（January 5, **1890**, Oiso）
  - In the latter part of November I became seriously ill; I have not yet fully recovered my strength, and am now obliged to rest at a quiet country town to regain certain strength to attempt further beggings. My humble idea of founding a university is to educate the coming race in higher studies, being influenced by Christian light and Christian **conscience**.

新島の conscience との出会いの歴史的背景

- 19世紀後半の米国は道徳哲学（moral philosophy）全盛の時代
- それ以前の時代のように価値の中心を聖書や教会に置くのではなく、「良心」に置くようになっていた（社会の世俗化）。